



絆～ほんとうに大
切なもの③



<パブー版>

比良岡美紀
2005、2007、2012

目次

皆様へ	1
(1 1)	1
(1 2)	3
(1 3)	5
(1 4)	6
(1 5)	8
(1 6)	10
奥付	
奥付	14

皆様へ

『絆～ほんとうに大切なもの』パブー版③です。

この③は少し多めに書き直しました。

式典の最中の出来事が描かれています。

二月中に③までは、と思っていたので、予定通りに行って少しホッとしています。

④は三月になるかもしれません。

よろしく願いいたします。

①はこちらから

<https://puboo.jp/book/43673>

②はこちらから

<https://puboo.jp/book/43688>

④はこちらから

<https://puboo.jp/book/46547>

(1 1)

俊彦は電車を降り、懐かしいキャンパスのほうへ歩いていった。キャンパスの場所は変わっていないが、在学中になじんだ風景とはまったく違う。一瞬違和感を覚え、次の瞬間、卒業してからの月日を思った。もう15年だもんな、景色も変わるよな……。感慨にふけりながら歩いていると、途中で小西に会った。

「ようトシちゃん、元気そうだな」小西は嬉しそうに話しかけてくる。

この年になってトシちゃんはないだろう、と俊彦は思ったが、久しぶりの再会に顔がほころぶ。

「お前も元気そうじゃないか」

10年ぶりにしてはやや素っ気ない挨拶を交わし、お互いの近況を報告し合うと、小西が言った。

「知ってるか？ 今日の式典、ステージに上がって花束を受け取るのは川端さんらしいぞ」

川端さん、という名前を聞いて、俊彦は胸がざわめくのを感じた。

つとめて冷静に「そうか」と言ったが、口から出た声を聞いてパニックしそうになった。なんで俺はこんなに声が裏返ってるんだ！？

「山岡が実行委員をやっているんで聞いたんだが、なんでも急に決まったらしい。もともと予定していた人が、来られなくなったんだそうだ」

幸い、小西は気づいていない。俊彦はなるべく音を立てないように、2、3回深呼吸をした。

*** **

依子は9時45分に講堂に着いていた。休日のせいか、学生の姿はまばらだった。式典があるとはいえ、出席者は多くないのかもしれない、と依子は思った。パーティーは午後からだものね。今から来る人は、そんなにいないのかも。

依子は思いっきり息を吸い込むと、はあー、と大きく息を吐き出した。大学に来たの、何年振りだろう。懐かしいな。講堂の向かいの図書館を眺めながら、依子は学生時代を思い出していた。

私はいつも、図書館の会議室を予約する係だった。理恵に佳恵に久美子、それに私の4人で、毎回おしゃべりしてたのよね。本当は勉強とか、「有意義な」目的にしか使っちゃいけなかったみたいだけど……。いつだったか私がそう言ったら、おしゃべりだって有意義な活動よ！なんて、理恵に言われたっけ。

あの頃は大学を出て、お父さんの決めた人と結婚するのが当然だと思ってた。でも人生っ

て色々あるのよね。選択肢はひとつじゃないって、最近実感するわ。幸せも、ひとつじゃない。大学を出て結婚すれば、幸せになれると思ってたけど――。

依子はため息をついた。若いときにもっと、いろいろ経験しておけばよかった……。

「あーあ、もっと遊んでから結婚したかったなあ」

思わず口をついて出た言葉に自分でも驚きながら、依子はあわてて周囲を見回した。見える範囲に人の姿はない。ホッと安堵のため息をつくと、後ろから声をかけられた。

(1 2)

「遊びたかったなんて物騒なこと言ってるのはだあれ？」

驚いて振り向くと、理恵がニコニコしながら立っている。

「理恵！ もう、おどかさなないでよ！」

「あら、おどかしてなんていないわよ。依子が勝手におどかされてるんじゃない」

「もう、屁理屈言わないで！」

思わずふくれっつらになる。理恵はうふふ、と笑って言った。

「案外早かったじゃない、依子。遅れてくるかと思ったわ」

その言葉に、依子はまた気分を害した。

「失礼しちゃうわね。私だっていつまでも遅刻クイーンじゃありませんから」

そこへ割って入る声があった。

「誰が遅刻クイーンだって？」

先ほど、俊彦と小西のあいだで話題にのぼった山岡だった。

「依子、山岡くん覚えてるわよね？」

理恵に問われ、曖昧にうなづく依子。

「光栄だなあ」山岡は嬉しそうに言った。

「学生時代、川端さんはマドンナだったからね」

そう言うと、依子にうやうやしくお辞儀をしてみせた。

「覚えていただけているとは、大変光栄です」

「やあね、山岡くんったら」

理恵が笑いながら言う。依子もほほ笑みながら、ふと、山岡と俊彦が一緒にいたことを思い出した。その瞬間、顔にほてりを感じ、あっという間に身体全体が熱くなる。私ったら、一体どうしちゃったのかしら？

「依子、どうしたの？ 熱でもあるの？」

理恵の問いかけにも、下を向いたまま首を横に振るのがやっとだった。

*** **

式典は、旧友たちと近況報告をし合うざわめきの中で始まった。俊彦も例に漏れず、かつての同級生たちと名刺を交換している。座席に座ったままなので不自由な体勢だが、間に座った者を介し、名刺があちこちに渡っていく。階段状になった講堂の座席から、感嘆の叫びが上がった。

「うわ、すげえ！ トシちゃんがこんないいところに勤めてるなんて知らなかったよ」

すかさず小西が茶々を入れる。

「岸本が知らないのは当然だろ。ずっと音信不通だったじゃないか」

岸本は照れくさそうに「まあな」と答え、話題を変えた。

(1 3)

「山岡が実行委員やってるんだって？ しかも川端さんと一緒に。よかったよなあ」

「よかった？ どうして？」

別の同級生が尋ねる。俊彦も気に入り、岸本の言葉に耳をすませた。

「入学早々、あいつ川端さんに告白しただろ。卒業したら田舎に帰って親の決めた相手と結婚するんだって言われて、やけになってさ。毎日のように飲みにつき合わされたぜ」

「へえ、そうなんだ」

「ああ。俺の川端さんを返せ、とか大声で叫んでな。誰がお前のだよ、って思ったけど、今こうして一緒にやれて、満足してるんじゃないか？」

ひとしきり話し終わった岸本は、ようやく小西の気まずそうな顔に気づいた。

「小西、どうした？ なんでそんな顔してるんだ？」

小西の視線の先に目をやると、青ざめた俊彦がいた。そこではじめてまずいことを言ったと気づいた様子で、岸本は小西に向かって、スマン、という手振りをしてみせた。

俊彦はたった今聞いた話を思い返した。自分が告白したときの、山岡の様子が腑に落ちた。そうだったのか、だからあいつ——。ふつふつと、怒りにも似た思いが込み上げてくる。

でもそんなこと——自分が告白して駄目だったなんて、そんなこと一言も言わなかったじゃないか！ 裏切られた気持ちになり、俊彦は小西に言った。

「山岡のやつ、水くさいじゃないか。小西、お前も知ってたんだろう？」

「ああ、知ってたさ。でもお前には言うなって言われたんだよ」

「なんでだよ、友達じゃなかったのかよ」

俊彦にそう言われ、小西は思わず言い返した。

「じゃあ聞くがな、もし本当のこと言ったら、お前どうした？ 何も言わないで卒業したか？」

たしかに――。俊彦は言葉を失い、青ざめた顔のままうつむいた。

もし本当のことを言われていても、自分は大丈夫と高をくくっただろう。俺は違うと思っただけだ。それで断られる方が、何倍も惨めだったに違いない……。

俊彦は急に自分が恥ずかしくなった。同時に、今までいかに周りのことを考えず、がむしゃらに突っ走ってきたかを思い知った。

兄貴にもよく言われたな。お前は突っ走りすぎだって。若いうちはいいが年を取ったら周りも見ろと、そう言われたっけ……。

やっぱり、兄貴には敵わないや。俊彦は天井を見上げ、その拍子にフッと笑いが漏れた。晴々とした顔だった。

俊彦のすっきりした表情を見て、岸本も小西もホッと胸をなでおろした。壇上では同期の中から選ばれた、代表者の演説が始まったところだった。

(1 4)

「準備はいい？ もうすぐ出番よ」

舞台袖で理恵に言われ、依子は緊張が高まるのを感じた。どくん、という鼓動が頭の中に響く。まるで心臓が耳のすぐ近くにあるようだ。

どうしよう……。依子は立ったまま下を向き、左手をぎゅっとかぶし状に握る。そのこ

ぶしを右手のひらで包むと、自分の手をじっと見つめた。

山岡と理恵は、壇上にいる演説者の話題で盛り上がっていた。

「今はお父さんの会社を継いでるそうだけど、昔はラジオ DJ で活躍してたんだって？」

「そうなの。人気あったわよ～。事業も成功してるなんてホント尊敬しちゃう」

「おまけにあんな美人だなんて、天は二物、いや三物を与えたもうたか！」

山岡が叫ぶと、理恵は言った。

「それは聞き捨てならないわ」

「聞き捨てならない？」

「そうよ。天からの贈り物だけで人生が成り立つわけじゃないもの」

「ほう。じゃあ何がある？」

「才能とか美貌とか、天賦のものは 1 %なのよ。天才だって 99 %の努力が必要なんだから」

「なるほど、彼女は努力してないと言わんばかりじゃないかと、そう言いたいんだね」

「ええ」

「これは大変失礼いたしました」

山岡は依子にしたように、またお辞儀をしてみせた。

「分かればいいのよ、分かれば」

理恵はそう言うと、ぶっと噴き出した。

「何やってるのかしらね、いい年して」

山岡も笑顔になり、懐かしそうに言った。

「松平さん、全然変わってないね。昔のままだ」

「まあ、誉めたって何も出ないわよ」

そういうつもりじゃ、と否定しながらも、山岡は笑顔を崩さない。

そんな山岡に理恵は言った。

「山岡くん、政治家に向いてるんじゃない？ 人の心を掴むのが上手いもの」

「俺なんか無理だって。政治家向きじゃないし」

「なーんて言いながら、実は狙ってるんでしょ」

理恵は笑みを浮かべながら、山岡に詰め寄る。

「正直に言いなさい。言わないと投票してあげないわよ」

「まいったな、ははは」

(1 5)

舞台袖の依子は二人の話を聞きながら、理恵に脱帽していた。こんなにリズムよく会話するなんて、私には無理だわ……。理恵って本当にすごい。専業主婦なんて勿体ないと思うけど。理恵ならきっと、世の中でもっと活躍できるはずだわ。

そう考えて、かつて理恵に言われたことを思い出した。

「家事が好きだからやってるの。家にいるのが勿体ないなんて、思ったことないわ。私は好きなことをしてるだけ」

なんとなく釈然としない思いを抱いていると、また理恵が言った。

「それにね、食事を作るのは高尚なことなの。お寺でも、食事を作るのがもっともレベルの高い修行なんですって。だからうちではあたしがいちばん偉いのよ」

最後の言葉に、依子は思わずぶっと噴き出した。それを見て、理恵もうふふ、と笑う。笑いながらも依子は刺激を受けていた。家事を高尚なものとして位置づける理恵の発想は、新鮮な驚きだった。依子も家事を修行、つまり自分を高めるものと考えて、今までとは取り組み方を変えている。そのおかげで単調な作業としか思えなかった家事に、新たな意味を見出すことができるようになっていた。

全部理恵のおかげ。依子はそうつぶやいて、これまでのことを思い返した。中学で知り合って、高校で親友になった。この大学へ来られたのも理恵のおかげ。原田くんと知り合えたのも——その瞬間、依子はまた顔のほてりを感じ、身体じゅうが熱くなった。その熱をさまそうと深呼吸をしていたら、理恵に声をかけられた。

「依子、呼ばれたわよ」

ハッと我に返り、あわてて壇上へ出て行った依子は、痛いほどの視線を感じた。出席者の間から話し声が聞こえる。自分の緊張を話題にしているのではないか、依子にはそう思えてならなかった。実際は昔話が大半だったが、依子に注目している出席者もいた。俊彦と、小西、それに岸本である。

「川端さんだ」

誰が言うともなく壇上に目を向けた三人は、いかにも緊張した様子で出てくる依子を見て、同じように緊張を感じていた。俊彦は依子の姿に、15年前と変わらぬ輝きを見た。そしてそのことに安堵を覚えていた。ずっとこうして見ていたい——。俊彦は固唾を呑んで依子の一挙手一投足を見守り、無事に花束を受け取って、舞台袖に戻ることを祈っていた。まるで父親だな、と思わず苦笑したが、依子の緊張はそれほどに明らかだった。

依子が花束を受け取って一礼し、舞台袖に戻ると、俊彦はふうーっと大きなため息をついた。小西を見ると、やはりホッとした顔になっている。続いて山岡が舞台袖から現れ、卒業15周年記念の祝状を同期生代表で受け取った。

(1 6)

依子とはいえば、終わった途端に力が抜けて放心状態になっていた。反対側の舞台袖に消えるはずだったのが、出てきた側に戻ってきてしまったのだが、とにかく終わったという、それだけを喜んでいて。だから理恵と山岡が困った顔をしているのも気にならなかった。

すぐに山岡が出て行き、祝状の束を抱えて戻って来た。その束を見て、依子はこの後の予定に支障が出ることに気づき、一転して落ち込んだ気分になった。

受付に入るため、早めにパーティー会場へ行かなければならないのだが、移動するには反対側へ行かなければならない。舞台上を横切るか、広く薄暗い講堂の中を歩くか、二つに一つだ。受付開始時刻が迫っている。講堂の中を移動しては間に合わない。しかし舞台を横切れば、式典の進行に支障が出てしまう。ちょうどそのとき、卒業25周年を迎えた卒業生の、代表挨拶が行なわれているところだった。一体どうしたらいいのか。依子は情けなくて涙が溢れそうになった。

そんなとき、いつも理恵が助け舟を出してくれる。

「うん、そう。悪いけどお願いね」

誰かに携帯電話で連絡をとっていた理恵は、いつもの調子で依子に言った。

「今、久美子と佳恵に頼んだから、ここにいても大丈夫よ。あとから行けばいいわ」

状況がよくのみこめない依子は、オウム返しに尋ねた。

「久美子と、佳恵に？ 頼んだ？」

「そうよ。だからここにいても大丈夫なの。式典が終わるころ、受付に行けばいいわ」

その言葉に山岡も安心した様子で、「川端さん、大丈夫だよ」と声をかける。

依子は事態を理解したのか、うん、うん、とうなずき、同時に涙をこぼし始めた。

「どうして泣くのよ。大丈夫だって言ってるのに」

「嬉しいのよ。嬉しくて涙が出てきちゃうの」

しゃくりあげるたび揺れる依子の肩を、理恵はしっかりと抱いて言った。

「ほら、笑顔を見せてちょうだい」

真っ赤な目でこくりとうなずき、ほほ笑みを見せる依子。

「涙をふいて。依子の泣いた顔なんて、見られたもんじゃないわ」

「何よ、それ。ちょっとひどいんじゃない？」

依子が頬をふくらませて抗議すると、理恵は笑って言った。

「そう、その顔よ。ようやくいつもの依子に戻ったわね」

「もう、理恵ったら！」

そう言いながらも、依子は理恵と山岡と交互に顔を見合わせ、うふふ、と幸せそうに笑った。

奥付

奥付

絆～ほんとうに大切なもの パプー版③

<https://puboo.jp/book/44553>

著者：miki-hiraoka

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/44553>

ブックログのプーパー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44553>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのプーパー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

絆〜ほんとうに大切なもの パプー版③

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
